

ソグド王離宮を掘る

—ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡(シャフリスタン地区)2023年度発掘調査—

寺村 裕史 国立民族学博物館准教授

宇野 隆夫 帝塚山大学客員教授

村上 智見 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター特任助教

ベグマトフ・アリシェル ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー・研究員、サマルカンド国立大学考古学科准教授

ベルディムロドフ・アムリディン サマルカンド考古学研究所上席研究員

ボゴモロフ・ゲンナディー ウズベキスタン科学アカデミー民族考古学研究センター上席研究員

サンディボエフ・アリシェル サマルカンド考古学研究所研究員

末森 薫 国立民族学博物館准教授

押鐘 浩之 大阪大学特任准教授

Excavations at Kafir-Kala in Uzbekistan in 2023: The Residential Area (Shahrستان) of the Sogdian Royal Residence

TERAMURA, Hirofumi Associate Professor, National Museum of Ethnology

UNO, Takao Visiting Professor, Tezukayama University

MURAKAMI, Tomomi Assistant Professor, Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University

BEGMATOV, Alisher Research Associate, Berlin-Brandenburg Academy of Sciences. Associate Professor, Samarkand State University, Department of Archaeology

BERDIMURODOV, Amridin Senior Research Fellow, Samarkand Institute of Archaeology

BOGOMOLOV, Gennadiy Senior Research Fellow, Uzbekistan Academy of Science, National Center for Archaeology

SANDIBOEV, Alisher Research Fellow, Samarkand Institute of Archaeology

SUEMORI, Kaoru Associate Professor, National Museum of Ethnology

OSHIKANE, Hiroyuki Associate Professor, Osaka University

1. はじめに

日本・ウズベキスタン共同発掘調査隊は、イスラーム以前かつ初期の中央アジアの歴史と文化、およびシルクロード交流の実態解明を目的として、2013年度よりウズベキスタン共和国サマルカンド市のカフィル・カラ遺跡において継続的に発掘調査を実施してきた。2022年度は、シャフリスタン地区の北寄り最も高い箇所(西側中央)に約10m×10mの調査区(Tr. N5)を設定のうえ掘り下げたところ、そのトレンチにおいて厚さ最大2.5mの建物壁を東西南北にそれぞれ確認し、南北10.77m、東西10.15mのほぼ正方形の大型の部屋(大ホール)の詳細が明らかになった。本年度はその調査区を南側に拡張する形での発掘を継続し、隣接する建物遺構の全容把握に向けて調査をおこなった。

また、シャフリスタンからシタデルへの通行路と想定される空堀を挟んだ南側において、標高が一番高くなった箇所にTr. 9を設け、南寄りのシャフリスタン地区における遺構の確認のための調査も実施した(図1・2)。

2. シャフリスタン地区 Tr. N5 の継続調査

2.1 Room 2・3の検出

昨年度は、シャフリスタン地区トレンチ(Tr. N5)において大型建物(大ホール)の調査を実施し、この大ホールが基底部1辺10m余りのほぼ正方形であること、4辺の壁際にスファ(ベッド状の高まり)があること、北側スファの中央部に南に張り出す長方形の日干しレンガ敷き遺構があること、隣室との出入り口は南側の東寄りに1箇所のみ存在することを確認した。今年度は、大ホールの南側の出入り口を掘り下げるとともに、その先に続く部屋の状況確認と、建物全体の構造を把握することを主な目的として、発掘を実施した。

その結果、大ホールから南に続く通路の先に二つの部屋が確認できたことから、大ホールをRoom 1として、今年度新たに検出した部屋をそれぞれRoom 2、Room 3と呼称することとした(図3)。

まずRoom 2は、短辺約3.5m、長辺約8.5mの長方形で、西側の壁際には幅約1.7mのスファ、南側の



図1 カフィル・カラ遺跡 2023 年度発掘区
[WorldView-3 衛星 includes © DigitalGlobe, Inc., NTT DATA Corporation]

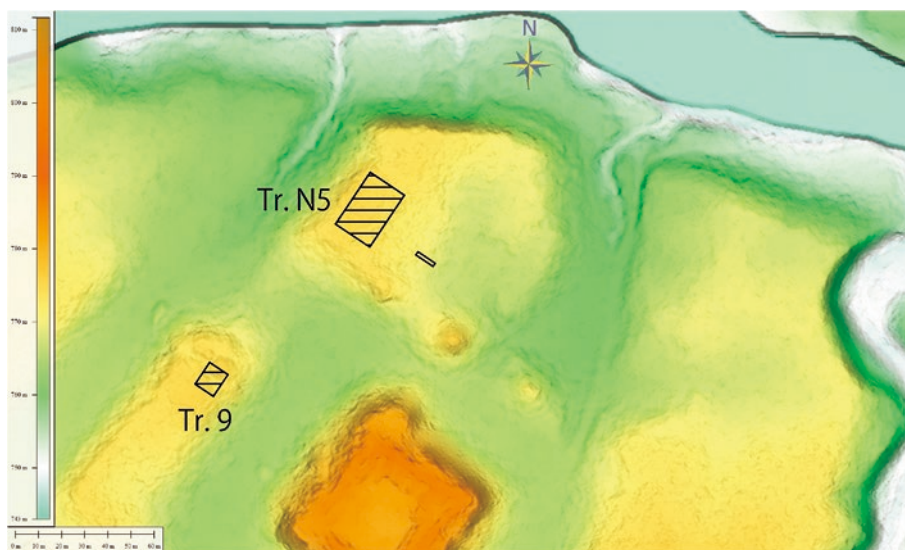


図2 DTM 上におけるトレンチのおおよその位置関係
[AW3D Enhanced 50 cm DTM, includes © DigitalGlobe, Inc., NTT DATA Corporation]

壁際には幅約 1.0 m のスファが設けられている。両スファの外縁(部屋の内側部分)には、日干しレンガで縁取りがなされていた。また部屋の南西隅からおおよそ 1.7 m の箇所では壁が途切れ、隣室(Room 3)への通路(通路幅約 1.2 m)が存在することが分かった。東壁(セクション)では、アーチ状の日干しレンガの屋根が崩れ落ちた様子が観察でき(図 4)、南側床面のスファも本トレンチの外側に続いている状況が見て取れることから、この Room 2 にはアーチ状の屋根が架けられていたことや、さらに長辺が南東方向に延びることが

推測できるため、部屋全体の面積はもう少し大きくなる可能性がある。

部屋の床面は、被熱を受けて赤くなり、ところどころ炭のようなものが混じった固い土の面まで掘り下げている。大ホールと同様、この部屋も火災に遭っている可能性は高いが、床面直上の層からは木材などの炭化物や土器片などの遺物の出土量はそれほど多くはない。部屋の壁面も、大ホールの南・東壁のように日干しレンガが剥き出しではなく、表面がきれいに漆喰で塗り固められていることから、火災に遭った後に清掃

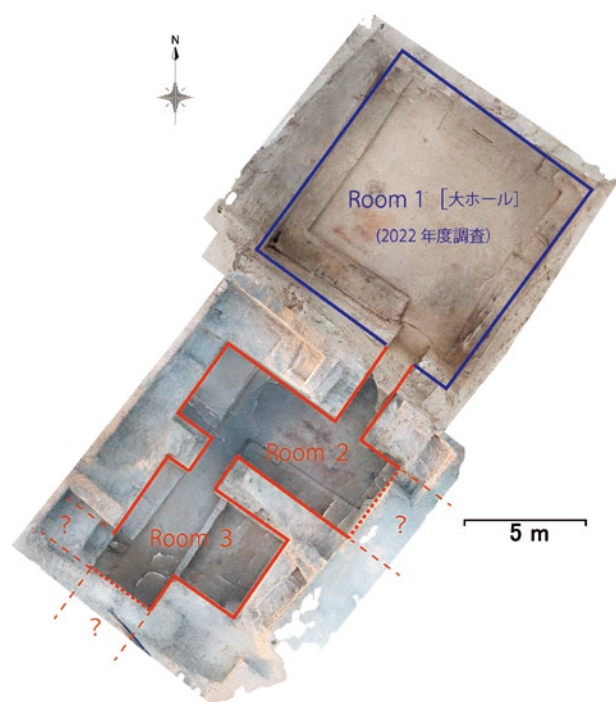


図3 Tr. N5 平面図(SfMにより作成した遺構オルソ画像。昨年度調査と合成。)

のうえ修繕がなされた部屋であったとも考えられる。

次にRoom 3は、短辺約4.0m、長辺約6.0mの長方形で、西側の壁際には幅約0.9mのスファが設けられ、長辺の真ん中約3mの箇所は日干しレンガで区画され、部屋内が二つに分割されている。ただし、この区画するための日干しレンガの列は、検出状況などから若干後の時代に付け足されたものであり、Room 2の床面と同時期には一つの部屋であったと推定している。さらに、その区画するための日干しレンガ列を延長するように、南壁が90°折れ曲がっている状況が確認できた(図3)。しかし、トレンチの南西隅が大きく攪乱されており、Room 3が長方形ではなく不定形の部屋であったのか、あるいはその折れ曲がった箇所が隣の部屋に続く通路の壁にあたるのかなどは、現時点では判断できない。

Room 3の床面に関しては、西側半分においてRoom 2と同じレベルまで掘り下げており、ほぼ同時期と考えて間違いなく、西壁には被熱を受けて赤黒く変色した漆喰と、それを覆い隠すように漆喰が上塗りされた状況が確認できている(図5)。遺物はRoom 2よりは若干多く、比較的まとまった土器片や動物骨も出土しているが、大ホールほどの大量の炭化木材・灰などは検出されていない。こうした状況から、Room 2と同様、部屋を修繕の上再利用された可能性が高く、



図4 Room 2の全景(北西から南東方向を撮影)。スファの検出状況と、中央奥の壁面(東壁)にアーチ状の日干しレンガの屋根が崩れ落ちた様子を観察できる。



図5 Room 3の西壁とスファの検出状況(南東から北西方向を撮影)

部屋を二分割する日干しレンガの列も、再利用の際に付け足されたと考えられる。

2.2 Room 2のスファに用いた日干しレンガのサイズ

Room 2において、東西方向スファの上端面(北端)で長手に配列した日干しレンガが出土した(図4)。これらは長辺幅と短辺幅の両方を測定できたものが7点と総数は多くはないが、測定値のまとまりがよく、かつ昨年度に確認した日干しレンガのサイズとは異なるものであった。その平均測定値と標準偏差は以下のとおりである。なお厚さは、日干しレンガとスファとの境の識別が難しく正確には測れなかったため、省略している。

*長辺幅平均47.1cm(標準偏差0.198)、短辺幅平均23.8cm(標準偏差0.206)、推定長幅比2:1

これらの数値は、長辺幅が1.6唐尺、短辺幅が0.8唐尺と理解できるものである(1唐尺:29.6cm)。以下、本例に昨年の日干しレンガデータを加えて再掲しておく。

- ・Room 1 壁日干しレンガ: 平均長辺幅 53.2 cm (1.8唐尺)、平均短辺幅 29.6 cm (1唐尺)、長幅比 1.8:1、平均厚さ 10.7 cm
- ・Room 1 日干しレンガ敷き: 平均長辺幅 51.5 cm (1.7唐尺)、平均短辺幅 27.0 cm (0.9唐尺)、長幅比 1.9:1
- ・Room 2 スファ日干しレンガ: 平均長辺幅 47.1 cm (1.6唐尺)、平均短辺幅 23.8 cm (0.8唐尺)、長幅比 2:1

これらの日干しレンガは、すべて西暦8世紀初め(712年と推定)の火災層によって埋没したものであり、一つの時期において用途に応じた複数のサイズ・長幅比の日干しレンガを使用したと推定している。一連の唐尺値をみても、体系的な日干しレンガの規格設定をおこなったことを、推定できるであろう。なおソグディアナにおける唐尺の使用は、従来予想していなかったことであるが、この時期のソグド社会と中国社会の密接な関係を示すものであり、その背景については別に論じたい。

3. 出土遺物

本年度調査においては、出土遺物の量と種類は決して多くはないが、先述したようにRoom 2とRoom 3で土器片や動物骨が検出されている。床面直上(8世紀頃)からは、破片になった土器も出土しているが数は少なく、完形のものとしては、上層よりカラハン朝後期の12世紀からチンギス・ハンが率いるモンゴル軍がやってきた13世紀初頭頃のものとして推定される、緑釉がかかった広口壺が出土している。また今年度は掘り上げた土を宿舎に持ち帰り、フローテーション(水洗選別)をおこない、小さな動物骨片や植物遺存体の検出と種類・量の把握にも努めた。その結果、デルフィヌ・デクリュエナール氏によれば、ヒツジの骨が多く出土した大ホールと異なり、Room 2と3からはウマやブタも含む多様な動物骨のデータが得られた。

Tr. 9では、小規模な建物遺構が確認され、部屋の内部から胴部径約70cmの大型の甕が据えられた状態で検出された(図6)。時期的にはイスラーム期の初期と考えられる。甕の内部の土をサンプリングし、土中に含まれ採取できた植物遺存体に関してはDNA分析を実施する予定としている。考古資料由来のDNA



図6 Tr. 9において据えられた状態で出土した大型の甕

分析は微生物などの環境要因によるDNA断片化が一般的であるのみならず、PCRを阻害し得る物質が多く含まれることも大きな障壁であった。調査隊では考古資料由来のDNA分析に特化した改良型PCR法を開発しており、本調査において採取した各動植物遺存体に最適化した形でDNA分析を実施することで、生物種・地理的情報・年代情報といった生物情報の獲得を目指す計画である。

さらに、本年度の出土遺物ではないが、シタデルでの過去の調査で出土した金製のペンダントや銀製のネックレスなどの宝飾品類について蛍光X線分析(XRF)も実施している。獅子面とみられる丸い銀製品にも肉眼で金箔が確認できることや、銀製ネックレスでは、貴石を象嵌する穴に金張りが確認でき赤色石の発色をよくするためではないかと推測しているが、XRFはそれらを確かめるための有効な手段となるだろう。科学的分析の詳細は別途報告する予定である。

4. Room 1 に設けた覆い屋根と温湿度モニタリング

昨年度の調査後に、埋め戻しをせず遺構を保存するため、Room 1(大ホール)の上部に覆い屋根を設置した(図7・左)。こうした処置をすることで、調査期間外に誰にでも遺構の検出状況を見てもらうことが可能になるが、一方で遺構の保存状況の継続的な把握も必要となってくる。そこで本年度調査と並行して覆い屋根の有効性を確かめるために、覆い屋内外の「温度」「湿度」について、30分ごとの変化を2週間モニタリングした。設置場所は図7・右のとおりである。

その結果、明らかに覆い屋根の内側のほうが外側よりも温度変化の振れ幅が小さくなり、湿度に関しても



図7 Room 1〔大ホール〕の上部に設けた覆い屋根(左)と計測機の設置場所(右)
内側：床面【①】と天井付近【②】、外側：直射日光の当たらない屋根の陰【③】に設置

同様の結果が得られた。温湿度の変化量として、覆い屋根の内と外で明瞭な差があることが確認できたため、一定程度の屋根の効果を期待できるだろう。また、計測器は、調査後もそのまま設置しているので、次年度調査でデータを回収すれば、通年での変化を把握できることから、こうしたモニタリングによって、遺構への温湿度変化が与える影響を引き続き検討していきたいと考えている。

5. 結び

以上で述べたように、Room 2とRoom 3の清掃・修繕の上で再利用されたような状況は、大ホールの調査で判明した第二段階(8~9世紀頃)の「再利用の試み」(村上ほか 2022)と連動する可能性が高い。シタデルの火災層と同時期のイスラーム勢力による攻撃(712年頃)によって焼けた後にも、この建物が活用されたことを示唆するものである。

また、Room 2は、大ホールに入る手前の部屋として、控えの間的な役割を担ったものとも考えられるが、南東方向にさらに広がる可能性が高いことから、建物全体で考えた際に建物そのものへの出入り口(玄関)が、この部屋の先に存在するのかなどが、今後の検討課題になるであろう。次年度以降、トレンチを南東側に拡大するなど、調査方針の検討をこれから進めたいと考えている。Room 3に関しても、南西側にどのように続くのかを、次年度以降確認する必要がある。

そして、各部屋の役割を明らかにするとともに、大ホールを含めたこの建物全体の構造を明らかにし、

シャフリスタンのみならず遺跡全体の中での位置付けを検討していきたい。大ホールの特徴的な構造が、アフシャブの「大使ホール」として知られるバルフマン王の宮殿とも類似し迎賓館を想起させることから、今年度発掘された前室(Room 2とRoom 3)も含めた建物全体の役割を明らかにすることは非常に重要となってくるだろう。

今年度の調査期間中に、カフィル・カラ遺跡を含むザラフシャン川流域の遺跡が一括で、「Silk Roads: Zarafshan-Karakum Corridor」として世界遺産に登録された。今後は、遺跡の発掘調査のみならず、その成果を踏まえた遺跡全体の保存と活用なども積極的に考えていかなければならない。

*本研究はJSPS 科研費、JP23H00703、JP23K17523の助成を受けた成果の一部である。

参考文献

- ・宇野隆夫、寺村裕史、村上智見、ベグマトフ・アリシエル、ベルディムロドフ・アムリディン、ボゴモロフ・ゲンナディー、サンディボエフ・アリシエル 2023「ソグド王離宮を掘る—ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡(シャフリスタン地区) 2022年度発掘調査—」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』98-102頁 日本西アジア考古学会。
- ・村上智見、寺村裕史、宇野隆夫、ベグマトフ・アリシエル、ベルディムロドフ・アムリディン、ボゴモロフ・ゲンナディー、サンディボエフ・アリシエル 2022「ソグド王離宮を掘る—ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡(シャフリスタン地区) 2021年度発掘調査—」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』23-27頁 日本西アジア考古学会。